

地区だより—北から南から—

平成二十五年度の活動の概要

北海道稲門教育会会長

北海道立札幌英藍高等学校長

井村 美彦



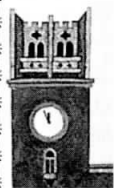
創立三十五年を迎えた北海道稲門教育会、現在、会員は百七十三名でそのうち現役教員百二十名が、全道各地の高校や教育委員会で活躍している。北海道外出身の会員も少なくないが、羽田直行便だけでも九路線あるので帰省もそれほど大変ではない。一方、札幌への出張に飛行機を使うことがあり、「転勤」と言えば事実上引越しを意味し、教頭の単身赴任率は四十%にも及ぶと言われるのが北海道の高校教員人生である。

早稲田の杜で青春の一節を刻んだ共通体験を持つかけがえのない仲間達は、年二回札幌に集合する。ひとつは冬季休業中に全道高校教育研究大会に合わせ開催する総会・教育懇談会である。今年は大学から中村正直キャリアセンター担当部長、尾島浩幸ナノ理工学研究機構事務長、久保田学

総合人文科学研究センター事務長のご出席のもと、現役・OB会員合わせて二十九名が参加した。これに合わせ「早稲田学報」の北海道教職版の意味を込めて平成二年に創刊された「北海道稲門教育会会報」の最新号が配布され、会員諸兄の活躍の様子を伺い知ることができる。もうひとつは、八月初旬に主に管理職と行政関係者等で開催される夏季研修会である。毎回、早稲田大学関係者や実業界のOBの講演会を行っており、昨年は、今や北海道土産の定番ともなった「三方六」などの和洋菓子で知られる株式会社柳月社長の田村昇氏（四十六商）の「家族の絆を結び、人と人との心をつなぐ」と題しての講演と教育懇談会を実施して親交を深めた。特に、若い社員を育成するお話には感銘を受けた。大学からは地域コーディネーターの久保田学、大坪恭子の両氏にご参加いただいた。

さらに、全国高等学校校長会議にあわせ北海道での教員就職を希望する現役学生を対象に講話も実施した。

さて、還暦を過ぎた私は、年度末で三十八年間の教職を去ることとなった。後輩達のラグビーで冬の訪れを、箱根駅伝で新年の到来を実感できる「早稲田OBの特権」を今





平成25年度総会
(1月9日 札幌ガーデンパレス)

後とも享受し続けることになるであろう。今、母校早稲田はグローバル化に向けて邁進している。これから我が国は東京や大阪から発信されるグローバル化だけではなく、全校各地が世界と結びつくグローバル化の時代になるであろう。いま早稲田の学生の四分の三は関東圏出身者であると聞く。これでは「集まり散じて人は変われど」とは言えなくなっ

てきているのかもしれない。早稲田の「再全国区化」を図り来たるべきグローバル化に臨むべきだ。そのためには「めざせ！都の西北奨学金」の拡充を期待することに合わせ、我々全国のOB達が早稲田の魅力を熱く語らねばならないと思う。

今後とも北海

道稲門教育界は早稲田大学稲門教育会の北極星として、がんばり続ける所存である。

平成二五年度茨城県稲門教職員会報告

茨城県稲門教職員会会長
茨城県立鬼怒商業高等学校長

渡 邊 吉 一



茨城県稲門教職員会が現在の形で再結成されて今年で七年目になります。七年前に高等学校の校長と茨城県の高校教育課や保健体育課勤務者などが中心で組織を作っていました。会員は学校管理職と教育庁の職員でした。初めての総会は平成二〇年一〇月でした。水戸市三の丸ホテルで参加者二〇人から始まりました。それが今や義務教育の先生方も大勢加わり、会員数五三人と堂々たる組織として発展してきました。小学校の管理職が一二名、中学校の管理職が一二名、高校の管理職が一九名、教育委員会等が一〇名となっています。特に県の教育長や教育次長も会員として名を連ねていただいております。今後さらに発展していくものと思います。

本年の総会は平成二五年一月九日にホテルレイクビュー水戸で開催されました。ご来賓として早稲田大学教